

目的 鎌倉時代に渡来した禅宗の僧衣の中で、殊に臨済宗の礼装用として用いられた道具衣の内に着る布衫の衫状の内外両面について現存する資料をもとに考察するものである。

方法 京都市内の寺、京都国立博物館、井筒博物館、四天王寺国際仏教大学図書館、実物資料により調査研究を行った。

結果 前回(第10報)で報告済みの道具衣は、外衣として直綴仕立て、袖巾、袖丈、身丈はいずれも大陸風の長大ではあるが、內衣としての布衫は、衫状は直綴の二分の一近い丈で、袖に関して道具衣と共通している部位もみられ、袴は傘合領、脇は欠腋に近く、布地の織り組織にも特徴があり、丁度公家装束の袍の内に着る下襲と類似点が多く、上衣と同じく公家との密接な関係と同時に、この宗教的立場が如何なるものであつたかを推察するところから来る。